未来なんて見えない。

ゆきみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未来なんて見えない。

【Ｎコード】
Ｎ５５２４Ｌ

【作者名】
ゆきみかん

【あらすじ】
主人公の巳乃（みの♂）の所に変なメールが届いた。
そのメールを友達に送ったら友達が行方不明に。
数日後、彼女も失った。そして気を失った巳乃は目が覚めると施設に。
もうここから全て狂いはじめてた。

＊第一章　始まり＊（前書き）

初めての小説、第一章はかなり短い・・・。気楽に見てくれると嬉しいです。

＊第一章　始まり＊

俺は今まで普通の生活をしていた。
普通の人間の暮らし。
朝、起きて学校に行く。夕方、学校から家に帰る。夜、携帯をいじりながら眠りにつく。
この繰り返し、だけど彼女から変なメールが送られた時すべて狂った。

『ーーーーーこのメールは死のメールです
このメールを送らなければ貴方は死にます。
ーーーーーこのメールを送らなければ、大変な事になるでしょう』

変なメールがきて、1ヶ月くらい経ったのだろうか。
結局そのメールは友達に送った。
学校で友達に言われた一言。

「俺、あのメール他の人には絶対送らないで保存する」

オカルト系が大好きな友達、チェンメを送るのに一番いい相手だった。
だけど友達はその数日後この世から消えてしまった。
突然の行方不明だった。
友達のお母さんは俺の事を一発殴り、泣き叫んだ。

「貴方のメールで行方不明になったのよ！貴方が犯人でしょ！？

返して！」

俺はメールを送った事を後悔した、友達が行方不明になるだなんて。

という昔の夢を見た、もう何日も見てない夢だったのに。

「巳乃ーー朝だよーー早く起きて学校に行きなさいー」

母さんの大きな声が俺の耳に入る。

彼女を待たせるわけには行かない。

「美喜を待たせるといけないから朝飯はあっちで食べるよ」

「あらそうねぇー・・・じゃあ、早くいってらっしゃい♪」

俺はチャリをとばす、風があたるのが気持ちい。

晴れた日、今日はいい予感がする。

「おはよう！巳乃遅いよぉ！また遅刻！遅刻したので後ろ乗っけてね♪」

「最初からそのつもり、今日は早く来たつもりなんだけどなぁー」

二人で笑いあう、そして学校に向かう。

美喜はトイレに行くからと言い、先にクラスに向かう。

学校に着くと、部屋はざわめいてた。

一箇所に人が集まってる、美喜の席だった。

「お前達何してんの？美喜の席に虫とか？それとも・・・・・・」

言葉を失った、美喜の机の上にはカエルの死体が何十体も。
この辺りでカエルは珍しい、しかも死体・・・。

「てめぇら！誰がやった！この死体を袋に入れろ！」
「あの・・・巳乃くん・・・美喜ちゃんは？」

丁度チャイムが鳴った、先生もクラスに入って来た。
なのに美喜が帰ってこない、トイレにしては長すぎる。

「先生！トイレに行って来ます。さーせん！」
「ちょ、おま！もうＨＲは始まるぞ！」

先生を無視して廊下を走る、静かな廊下。
女子トイレの前に来た、美喜専用のトイレというのを聞いた事がある。

「み、美喜ぃ？ＨＲ始まるぞ？入るぞ？いいかぁ？」

廊下に誰かいないか確認してから女子トイレに近づく。
そっと中を見る、他の人から見たらただの変態だ。

「美喜ぃ？いたら返事してくれぇ・・・・・・・・・」
「み・・・・・・の・・・・・・・」

どこからか声が聞こえてきた、誰の声かすぐわかった。

「美喜！なんだよぉー・・・いるなら早くでてこいよぉー・・・」
「動けないんだよ！誰かいるの！助けてよ！巳乃ぉ」

いつもと全然違う声、震えてるのが凄くわかる。

俺は助けを呼ぼうとした、でも足が動かない。

＞ヤメロ　コノオンナハオレノモノダ　スベテノハジマリハメールナンダ＜

変な声が聞こえる、叫ぼうとしても声は出ない。

「巳乃？いるの？・・・・・・いやっ・・・・誰？近づかないで！キャーーーー！！！！！！！」

静かになった、俺はそこに倒れこんだ。

「巳乃くんー？大丈夫ですかぁ？」

先生が俺の顔を覗き込んでる、そして目を覚ます

「巳乃くんったら廊下で寝てたのよ？」

「え、トイレの前じゃなく？廊下？」

「そうよ？購買の近くの廊下、トイレの前だなんてぇ」

そこで全て思い出した、美喜の事・・・。

「せ、先生！美喜さんは！？美喜はどこですか！？」

「美喜？って誰かしら・・・？一年生か三年生の人？」

「え・・・？俺と同じのクラスの佐奈雅　美喜ですよ？」

先生はとぼけてるのか・・・？

「先生美喜さんなんて知らないわよ？貴方の夢の人物なんじゃなく？」

全て、全てあれは俺の夢？

＞オシエテクレ　オレハダレ？　アイツハオレノカノジョダッタヨネ？＜

俺は叫んだ、先生は俺を止めようとする。
俺は暴れる、先生を殴った。
殴る、叫ぶ、泣き喚く。

「美喜ぃ！！！！！！！！！帰ってきて！俺の事待っててくれよ！」

俺はまた眠りについた、夢を見た。
美喜の夢だった、笑ってる愛らしい姿。
でも美喜は俺から遠くなる、笑顔もだんだん消えてく。
俺は数日間目覚めなかった、ある施設に入ってた。

「ここはドコ？誰もいないし静かすぎる」

白い部屋にベットが一つ他には何もない、静かな施設。
紙が落ちてる。

『みなさん、この施設は安全。強化ガラスに食事も豊富
快適施設、ランド施設に来てください！』

という宣伝チラシだった。
俺は宣伝チラシをクシャクシャにしてポケットにしまう。

俺は部屋から出ようと思い、出口に近づく。

〔電子カードヲイレテクダサイ　ナイ場合ハロックヲ解除シテクダサイ〕

俺は部屋を見る、なにもない。
ロックを解除する為、とりあえず自分の誕生日を入力した。

〔１０２４　ロック解除〕

「俺の誕生日!?まぢか・・・俺って強運?」

そんな独り言を言いながら、廊下に出た。

＊第二章　出会いと別れの交差＊

ここは前にも一度来てる・・・・・・・？
わからない、とりあえず施設から出ることを優先に。

「巳乃・・・・・・？あ！巳乃だ！」

突然抱きつかれ、倒れこんだ。
抱きついてきた人物は美喜の妹だった。

「お、美架・・・美喜は？あ・・・・・・」
「美喜？だぁれそれ？お兄ちゃんの新しい彼氏？」

美架とは仲がまぁまぁ良い方だった。
美喜と似てて、とてもかわいらしい女の子だった。

「つーか、なんで美架はここにいんの？」
「美架も知らなぁい、起きたらねベットにいたの」

美架は小学3年生・・・・・・だったような。
とても泣き虫な美架、でも強気な部分がある。

「あのさ・・・・・・お兄ちゃん美架も一緒に行っていい？」
「うん、一緒に行動した方が安全だと思うしね」

美架は笑顔になり、手をつなぐ。
知人に会えたのは嬉しいが、小学生ではまだ何もできない。
少しの沈黙、もくもく歩く俺。

何時間歩いたのだろうか・・・。まだ30分とかだろうか、時間が長く感じる。

「お兄ちゃん？歩くの速いよぉ・・・うぇぐ・・・・・・お母さんどこぉ・・・うぇぐ」

暑い施設、ストレスが溜まってる。美架は俺にベッタリ。

「チッ・・・おい、美架！！！！！！！！！お前うぜぇよ！！！！！！！」

美架は此方を見て震えてる、美架に怒った事はなかった。顔を暗くする美架、そして急に笑い出す。

「へぇー・・・お兄ちゃん、そんな人だったんだね。天国の美喜が悲しんじゃう。」

違う、声は美架だけど全然違う人だ。美喜の事も覚えてる・・・？笑い続ける美架の姿をしてる奴、不気味。

「お、お前は誰なんだよ！美架を返せよ！美喜も・・・返してくれ」

「お主はメールで人を殺すという罪を犯した。友達の母親は大切な人を失った、お主も失うべき」

怒りと悲しみが溢れ出る。

「美喜はどうした！？美喜に触れたら殴るぞ！！」

「我は指名を果たしたら消える、お主の大切な人がどうなったか我は知らぬ」

すると美架の姿をした奴が光だし、小さい女の子になった。
でも女の子には、しっぽがある。つの、黒い服。黒い翼

「我は悪魔のピウーノ。我の指名はお主を歓迎しろとの事、さぁついて来い」
「てめぇ・・・意味不明なんだよ！聞きたいことが山ほどあんだよ！」
「とにかく我について来い、我は・・・指名を果たせば消えるんだ」

その時、ピウーノの寂しげな顔を見て心が痛む、指名を果たしてしまえば消える・・・。
仕方なく悪魔のピウーノについてく、沈黙が続く。

「お主、聞きたい事を今言え。我の指名が終わるまでは聞けるぞ」

またまた沈黙、俺は言葉を失った。コイツは敵なんだろうか、味方なんだろうか。

「何をしている！話を聞きたいなら早く聞け！ばかやろう」
「ば！？ばかやろう！？あ、あぁ・・・ここはドコなんだ？」

ピウミーノは少し考える顔をして答えた。

「簡単に言うと異界だ、お主の精神だけが此方にいる。もちろん精神が死ねば肉体も腐る」
「へぇ・・・え、でもチラシ・・・では快適施設がどうのこうのって・・・・・・」

ポケットに入れてたチラシを取り出す、クシャクシャだ。

「もともと施設だったんだ、親のいない子供の為の施設。」

「お前もその施設の一人だったのか？」

ピウーノは顔を一瞬暗くしたが、すぐ俺に目を向けた。

「我は悪魔だぞ？人間じゃないぞ？笑わせるな、人間と悪魔は結ばれない」

そこでまた沈黙、触れてはならない事を聞いてしまったのか・・・。

ピウーノは消えてしまう身であり、悪魔。人間が嫌いなのか。

「ついたぞ、ここがお主を歓迎する場所だ。私の使命は終わった・・・わけじゃない、歓迎するまでだ」

「お、おぅ・・・つか歓迎て何すんの？」

ピウーノは無視して部屋に入る、俺も後ろからついてく。

「美喜！？・・・ホントに美喜なのか！？」

イスに座ってる女の子、美喜の姿が・・・。

美喜は口をガムテープでふさがれてる。

「ピウーノ・・・てめぇ！！！！！」

そう振り返った途端、ピウーノが人差し指を此方に向けてる。

別に武器などは持ってない、人差し指を俺に向けてる。

「お主は撃たぬ験し撃ちを一回・・・ばーーん」

ばーーん　と言う掛け声と一緒に壁に穴が、ピウーノの指から煙。
美喜は叫んでる、ガムテープで聞こえないが。

「クフフ・・・ごめんね・・・グスッ・・・し、使命を・・・」
「は、はぁ？お前なに泣いて・・・」

また人差し指を向けてきた、次は俺の頭を狙ってる。
ピウーノは本気だ、でも何故ないてる・・・？

「最後にお主の遺言を聞いてやろうか？さぁ、美喜に遺言を」
「・・・・・・・・だ」
「・・・？聞こえん、大きな声で美喜に遺言を・・・」

そして俺はここから何が起きたか・・・・・・わからない。
突然叫び声が聞こえて・・・・・・ピウーノの叫び声だった。

目が覚めた、俺は床に倒れてる。
床が汚れてる、何色・・・？それは真っ赤な赤色

俺は起き上がる、そして美喜を探す。
美喜は血まみれだったが、なんとか生きてる。

『ジャア、コノチハダレノ？』

「グチャリ・・・・んなんか踏んだ？」

床を見る、血・・・と一緒に頭が転がってる。
吐き気がした、しかもピウーノの顔だった。

白目を向いて、口を開けてる。涙がうっすら。
胴体を捜す、頭の遠くに落ちてる。

「だ、誰が・・・？こ、こんな酷い事・・・」
「アンタだよ・・・？我をメチャクチャにしたの・・・」

足を掴まれた、胴体だけ動いてる・・・。
ピウーノの顔が俺に近づく、逃げたくても足をつかまれてて逃げれない。

「我はお主が好きだったんじゃ、強いお主が・・・」

泣きながらピウーノは言う、もう死にかけなのに

「指名には逆らえない・・・ごめん、ごめん・・・」
「お、おい・・・泣くな。でも俺がお前を・・・？」

そして今回の任務内容と今までの事を全て話してくれた。

「お主は急に奇声をあげ、我はメチャクチャに・・・。」

ピウーノは胴体と頭が離れてるのに、話をしている。
ここで悪魔と人間の違いがわかる。

「そして今回の任務内容はお主を殺すだけだったが、お主と・・・・」

言いかけたとき、ピウーノの頭が潰れた。

「喋りすぎたようだな、ピウーノ。お前は失敗作だ」

男の人が手でピウーノの頭を握りつぶした。
手でグチャグチャと目玉をほじくる、そして潰す。
血まみれの手を差し出される。

「ん、あ、やぁ君が・・・巳乃くんだっけ？よろしくね」

＊第二章　出会いと別れの交差＊（後書き）

今回も短いかもしれません、誤字があるかも知れません（；＾ω＾）

よくわからない内容ですが（；＾ω＾）

＊第三章　ほどけない問題＊（前書き）

とりあえず
いろいろとゴメンなさいな感じです┐〇ペコ

＊第三章　ほどけない問題＊

その男は手を差し出したまま俺を見つめる。
肉の破片が手にグッショリついてる。

「ちぇっ・・・・・・握手は？礼儀も知らないの？」

言葉を失う、男はニコニコ笑いながら手をハンカチで拭く。
男の年齢は大体２０代くらいの若い感じだ、そして黒髪。
身長は普通より少し低め、声は大人な感じ。

「お、お前・・・誰だ！！！」
「あ、やっと喋ったよ！僕？僕は・・・なんだろうね」

ニコニコ顔の男、ピウーノを失敗作と・・・。

「んっと・・・ピウーノの親って言えばいいかな？」
「ピウーノの・・・親？説明しろ！親ならなぜ！なぜピウーノを殺す！」

困り顔の男、そして静かに言った。

「僕は悪魔の中で一番偉い悪魔、呂亜。」
「悪魔の中で一番・・・・・？」
「そう、あのメールは悪魔のメールだったんだ」

くすくす笑いながら言う呂亜、話を続ける呂亜。

「悪魔の大好物って知ってるかい？」

「大好物？し、知ってるわけないだろ！！」
「それは、人の不幸。食べ物じゃないけどね」
よくわからない、悪魔？俺はただの学生だったんだぞ？
ここは異世界とか、不思議の国なんかじゃない。
「ピウーノは君の不幸を食べ、強い悪魔になろうとしてたんだ」
「なんで・・・なんで俺なんだよ！！」
「君が天使だから、天使の不幸は悪魔の大好物以上のものだ」
また意味不明な言葉が出てきた、天使？
俺が天使？俺は普通より少し化粧の濃い女の人から産まれた純粋な男の子だ。
「君の母親が悪魔と実は交際してたっていう事件は懐かしいね」
「もう・・・もう・・・やめてくれないか？嘘だろ？おい」
「そして君の母親は交際を他の天使にバレてしまい・・・死刑になった」
俺の震えが止まらない、呂亜はニコニコ。
俺は覚えてない、母親が天使？ありえねぇ
「君は母親がいないと泣いてしまう子だった、だから地球に降りたんだ」
俺は急に倒れそうになった、目の前が暗くなったんだ。
「そろそろ限界だね・・・【除架】」
「除架・・・？なんだ、それ？ハァハァ」

もう目の前が真っ暗になった、意識はあるが声も出せないし立ち上がれない。
人の声がする、誰の声かわからないけど凄く安心する。

「もーう・・・・・起きなさいってば！！！」
「・・・いってっ！！！！！！！！」

目を開けると目の前には美喜の姿が。
お姫様のドレスみたいな格好で俺の事を見つめる。
そして突然変な事を言い出した。

「ねえ巳乃？私は一体誰だったの？」
「・・・はぁ？お前は美喜だろ？」

美喜は悲しそうな目で此方を見つめる。

「私は人間じゃなかったのよ・・・きっと」
「そんな、お前は・・・・・・」

言いかけたとき、部屋の扉が開き黒ずくめの男の人が入って来た。

「美喜殿・・・我たちの仲間になる時が来たようです。」
「え・・・？仲間って？」

黒ずくめの男が美喜の腕を掴んだ。

「痛っ・・・・・・あの仲間になる時って？ねぇ！ねぇ！」
「おい！美喜を放せ！おい！」
「美喜殿は我々の仲間になるのです。邪魔者は排除しますよ？」

黒ずくめの男に首を絞められる、美喜をふと見る。
いつもは見ない青ざめた顔、震えてるのがわかる。

「美喜殿・・・行きましょう。美喜殿自身も楽になりますよ。きっと・・・」
「い、嫌っ！・・・巳乃・・・！！私・・・仲間になりたくないよぉ！」

呼吸がうまくできない、美喜を助けたい・・・。

「巳乃！巳乃！！！起きて！！！！！嫌だ！嫌だ！！！」
「美喜殿・・・ごめんなさい。少しの間静かにしててください」

黒ずくめの男は美喜のお腹を軽く殴った。
美喜は静かになった、腕をダラーンと垂らして。

「魅喜ぃぃぃ！！！！！くそ・・・なんで俺ばっか・・・」

静かになった部屋、また独りになった。

呂亜の言ってた天使・・・まだ意味がわからない。
俺が天使だったという証拠もない、母親が死刑にされた事も。

「おはよう！天使の巳乃くん！」

呂亜が部屋に入って来た、そして俺の隣に座る。
そして静かに口を開いた。

「僕の彼女も死刑になったんだ、彼女は天使だったんだ」
「え？　なんで・・・なんで呂亜が死刑にならなかった！！」

俺は立ち上がるだけで殴る事など・・・・・・できやしない。
ピウーノの頭が潰れるのを思い出すと怖くて何もできなくなる。

「僕は悪魔狩りのターゲットにされたんだ。でもね彼女が助けてくれた」

「はぁ？悪魔狩り？また新しい言葉かよ・・・」

呂亜は何かを唱えると手から本が。
題名は悪魔狩りと書いてあった、表紙には男の子が十字架に縄で結ばれてる絵だった。

「この本を読めばわかるさ、悪魔の気持ちも・・・」

おそるおそる本に手を伸ばす。
表紙を開くと文字がビッシリ書いてあった。

【悪魔狩り：天使が考えた悪魔狩り。心の汚い悪魔、人の不幸を好物にする悪魔。
この悪魔を全て殺す為、悪魔狩りを毎年やっている
悪魔狩りで捕まった悪魔は十字架に縄で縛られ、そのまま抵抗する事はできず死んでしまう
また、女の悪魔は檻の中に放置する事。心のなくなった悪魔に天使の心を授ける儀式をやる事】

これが悪魔狩り・・・・・・でも悪魔の気持ちだなんて全然わからなかった。
次のページを開くと　【悪魔の騙し方】　と記されてる

【悪魔の騙し方：天使は恋の飴玉を食べ、悪魔に遭遇するよう仕

掛ける
そこで天使は一ヶ月の間だけ会った悪魔に恋をする。
一ヶ月の効果を過ぎれば、天使は死ぬ事になるだろう。そう考えるのが一番だ
効果が過ぎる前に、悪魔を天使の協会におびき寄せる。
まんまと引っかかる悪魔をそのまま十字架に吊るしてしまえ。】

悪魔は本気で恋をしてるのに、天使は嘘の恋をしてる。
天使は悪魔と同じくらい悪い奴らだ。
人の事を騙してでも悪魔を殺そうとはしなくてもいいだろう。

「わかったかな・・・？僕の彼女は、死んでしまった」
「効果がきれてしまったから・・・？」

呂亜は笑顔、でも悲しい顔にも見える。

「効果じゃないよ、天使達に殺されたんだ」
「え？でも天使は天使を殺すだなんて・・・」

中間テストで最下位に近い俺には意味のわからない事だった。

「天使の中で一番偉い人とは、君のお婆ちゃんだよ？」
「だけど・・・！！悪魔だって悪いだろ！？」

「違う！！！！！君は僕の彼女を殺した天使なんだ！！悪いのは天使なんだ！！！！！」

急に強張る顔、いつもニコニコしてる呂亜が怒っている。
俺は言葉を失う、呂亜は叫んでる。

「僕は独りなんだ！！もう嫌だ！！悪魔を作れば仲間ができるのに！！！！」

呂亜は頭をグシャグシャさせた。
そこに一人の老人みたいな人が出てきた、老人はゆっくり呂亜に近づく。

「呂亜様、儀式の準備ができました。これで呂亜様は独りじゃないですよ」
「わかった・・・すぐ行く。女のほうは大丈夫か？」

老人は頷く、そして呂亜と老人は部屋を出た。

「儀式・・・？美喜・・・！？」

俺は部屋のドアを叩く、すると普通にドアが開いた。

「はぁ？案外すぐ開くのか？つーか美喜・・・！！」

急いで廊下に出る、一本道。
目の前には赤い扉が、少し声が聞こえる。
急ごう、急ごう、美喜を早く助けないと。

この気持ちで心はいっぱいだった。

急ごう。早く。

＊第三章　ほどけない問題＊（後書き）

自分でも内容がわからなくなってきた・・・（；＾ω＾）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5524l/

未来なんて見えない。

2011年10月6日14時19分発行